

## 大腸内視鏡検査時に寄生虫が認められ、遺伝子検査によりブタ回虫と鑑別できた一症例

◎児玉 雅季<sup>1)</sup>、富永 美香<sup>1)</sup>、伊藤 富佐子<sup>1)</sup>、古谷 裕美<sup>1)</sup>、中原 由紀子<sup>1)</sup>、國宗 勇希<sup>1)</sup>、岡山 直子<sup>2)</sup>、西岡 光昭<sup>1)</sup>  
山口大学医学部附属病院 検査部<sup>1)</sup>、山口大学医学部附属病院 遺伝・ゲノム診療部<sup>2)</sup>

【症例】60代男性。海外渡航歴なし。自家製栽培の生野菜は定期的に摂食していた。以前より便潜血陽性のため大腸内視鏡検査を実施し、複数の大腸ポリープを認めており経過観察中であつた。20XX年11月に大腸ポリープの定期検診のため、大腸内視鏡検査を実施中、肝湾曲に白色線状の虫体を発見した。虫体は腸壁へは刺入しておらず腸内で動き回っており、腸壁にも明らかな炎症所見を認めなかつた。虫体を鉗子で把持し、吸引にて回収後、回虫疑いとして検査室に提出された。同時に大腸内視鏡検査時に採取された便汁も併せて提出されたが、虫卵検査では虫卵を確認することはできなかつた。虫体の全長は7cm程度と小さく回虫の可能性が高かつたが、鑑別が困難であつたため、虫体を一部切り取り、DNeasy Blood & Tissue Kit(QIAGEN)を用いてDNAを抽出した。Zhu Xらの報告(Int J Parasitol. 1999 29:469-78)を基に、リボソームDNAのITS領域をターゲットとしたPCR-RFLP法を用いて鑑別を行った。プライマー配列、PCR条件、制限酵素はZhu Xらの報告に従つた。バリデーションとしてPCR産物の塩基配列解析をBigDye™

Terminator v3.1 Cycle Sequencing Kit、3500 Genetic Analyzer (Thermo Fisher Scientific)を用いたサンガーシーケンス法により行った。PCR-RFLP法及びシーケンス解析結果よりブタ回虫であることが判明し、担当医へ報告した。

虫体発見から1か月後に再度受診され、症状もなく、便虫卵検査を再度実施したが陰性であり経過観察となつた。虫体発見から半年後の20XX+1年7月に再度大腸内視鏡検査を実施されたが、虫体は発見されなかつた。

【考察】回虫はヒトの腸に寄生する最大の線虫である。回虫の成虫は20~30cmであるため、今回は幼虫である可能性が高い。幼虫包蔵卵を摂取後は4日以内に小腸で孵化して幼虫となり、一部の幼虫は腸壁を貫通し、血行性に門脈を通り肝臓へ達するが、今回は症状もなく、腸壁を貫通してはおらず、無症候性であつた可能性が高い。昨今寄生虫の形態学的鑑別を経験することが少なくなつてきているが、遺伝子解析を実施することで確実に鑑別できた経験は今後の寄生虫検査において有用であつた。

連絡先：0836-85-3753